

Books

Esqy Selection

『体の中の美術館』
布施英利
筑摩書房 ¥2,100



本誌でも連載中の芸術学者、布施英利による新刊。デビュー作『脳の中の美術館』を彷彿とさせるが、さらに進化。人間の身体には太古からの記憶がある。芸術はその身体から生まれてくるものである。目、脳、手、足、肺、背骨、内臓と7つの部位に分けて、目の視覚効果や脳の処理能力による芸術の見え方、また、それぞれの身体が作り出す造形やイメージなど、縦横無尽に芸術を解明する。

『トム・ウェイツ
素面の、酔いどれ天使』
パトリック・ハンフリーズ
金原瑞人訳 東邦出版 ¥2,730



暴言や奇言といった言葉の方がその人となりがよく伝わる、という人がいる。トム・ウェイツがまさにそうだ。本書の著者は、トム・ウェイツならではの名言、迷言を数多く拾い、「クロージング・タイム」などの名曲の誕生した背景や幅広い交友関係など、この希有な音楽家の人生を丹念に綴る。アウトローに徹底したその生き様は、今の時代だからこそ響く古典のようでもある。

『サウンド・バイツ』
アレックス・カブラノス
実川元子訳 白水社 ¥1,890



人気バンド、フランツ・フェルディナンドのボーカルによるグルメ本。グラスゴー出身ということで、何かのジョークかと思って読み始めたが、彼はただのスコットランド人ではなかった! 香港では屋台をめぐり、マドリードでは星つきレストランを訪ね、ブエノスアイレスでは牛のあらゆる部位を喰らう……。美食からB級グルメまでを、とんとちと哀愁が効いた文体で鋭く批評した、会心作。



21世紀の「彼」。

小路幸也=評
text by Yukiya Shoji

彼 しかない。

男として生きていく中で、それ以上の褒め言葉はないだろう。もちろん僕は生まれてこのかたそんな台詞をもらえなかった事はない。彼 しかないじゃないか。

七十年代に青春を過ごした男で、タイトルを聞いて胸ときめかせない奴は信用できないとすら思う『傷だらけの天使』。ショウケンこと萩原健一さんが主演したドラマだ。どういう物語かと問われれば、(何もかもがカッコ悪くて何もかもがカッコいいドラマ)と答える。それ以上の言葉を費やしたところ、何にもならない。

この項を書いている時期、副主人公格で出演し、異彩を放った水谷豊さんに脚光が当たっていた。インテリな刑事役で人気を博して

いるのだけど、僕からすると水谷さんはいつまでもあの(アキラ)だ。今もショウケンが叫ぶ「アキラあー」という声が聞こえてくる。

萩原健一さんが演じたのは、中卒で調査事務所の使いっ走りをしてる(木暮修)だ。別段特記する能力はない。事件を解決するわけでもないし、大金を稼ぐわけでもない。正義漢でもないし、悪党でもない。当時は中学生だったのだ、あのドラマで描かれたこと全てが理解できたわけじゃないけど、それでも、魅かれた。その全てに魅了された。

何十年も経った今、僕の中に残されたのは、裏切られても潰されても墜ちていっても失わない(何か)だ。言葉にするのは野暮だろうけど、

矜持と言えはいいだろうか。

大都会の裏側の底辺を這いずり回ってはいいても、(木暮修)にはそれがあつた。だからこそ憧れたのだ。ちっともカッコよくないのにカッコいい(傷だらけの天使)たちに。

そして、これは、矢作俊彦さんが書いた『傷だらけの天使』だ。七十年代に青年だった(木暮修)の(今)を描けるのは、日本中探したって、彼しかないじゃないか。

(矢作俊彦)が(木暮修)を書いたのだ。もうそれだけでこの物語は完璧な形で存在している。だから、何も語る事はない。語る必要もないだろう。文句がある奴は一列に並んでくれ。いいから並べ。

い)と言っていたとか。名人は歳をとるのがうまかった。

落語は「学校で教えないこと」を教えてくれる、と矢野は言う。そして、実人生では、こっちのほうが役に立ったりするのだ。

『落語の国からのぞいてみれば』は、古典落語を媒介にして、昔(江戸後期から明治)の暮らしと現代のそれを比較する。昔は個人というものがなかった。今といちばん違つたのはそこだろう。たとえば年齢。昔は数え年で、正月になるとみんな一斉に一つ歳をとった。年齢は個人のものではなく、世間のものだった。名前もそう。商家の主が代々名を継いだように、名前も個人のものではなく、与えられた役割のものだ。時刻の数え方も、時計のように絶対的な時間があるのではなく、太陽の運行によって変わった……。

こう書くとは難解そうだが、著者は「ずんずん調査」のホリイちゃんである、語り口は落語よりも軽やかだ。しかも、巻末に親切な参考文献紹介と落語解説がある。落語を聴いたことがない人でも楽しい。

落語はブームだけど、俳画もブームにならないかな、と思っている。俳句&絵画という形式の藝で、江戸後期に流行した。俳句としても絵画としても中途半端に見られるためか、現在の評価はいまひとつ。『江戸俳画紀行』は、紀行文に見立てた俳画案内である。

おもしろいのは、俳画の絵は上手くなくてもいい、ということである。子どもの落書きのような下手な絵でも、一句添えられることで何とも言えない風情が出る。ユーモラスであり、庶民の生活に密着している。今で言う「あるある」感か。このゆるさがたまらない。